

## 黒い犬

……異界の門を開くためには「鍵」が必要である。「鍵」を精製する材料は、深い絶望、悲しみ、そして怒りの三要素に加え、自らの命をも投げ出す決意である。これらが混ざりあつて初めて「鍵」となり、次元を超越する門が開くのだ。門の向こう側には虚無があり、そこには永遠にして悠久の時を過ごす「神」が鎮座しているとされる。かつて地上に存在していたその文明では、長い歴史の中でほんのひと握りの人間だけがその世界へと赴き、「神」によつて「力」を与えられて戻ってきている。その中には、後に自らが「神」となった者も存在しているのだ。そして「鍵」は、人間だけでなく、全ての存在に等しく平等に与えられている……。

神埼庄三郎著「未知なる文明を求めて」より抜粋

\*

……その事件はまさに鬼畜の所業であつた。

被害者である林原杏はどこにでもいる普通の女子大生であつた。父親を早くに亡くし、母子家庭で育つた彼女は、大学を通うにあたつて母親に負担をかけまいと、奨学金とアルバイトで学費と生活費の全てを賄つて生活していた。昼は大学で勉強に精を出し、夜はアルバイトで接客に励む。学業とアルバイトの両立は、決して楽なことではなかったが、それでも彼女は弱音を吐かずに頑張つた。

彼女には夢があつた。教師になり、教壇に立つという夢が。かつてそれは、志半ばでこの世を去つた父の後を追う行為でしかなかったが、今は違う。今は彼女自身の夢となり、目標となつて、彼女が前へ進む原動力となつて彼女を支えていた。

彼女にはもう一つ、心の支えとなる存在がいた。アパートの大家さんから特別に許可を貰つて飼ひ始めた小さな白い雑種犬である。

二年前、車に撥ねられ、瀕死だったその犬を、偶然にも近くを通りかかった杏が助け、病院に連れて行き、診てもらつた。犬は一命を取り止めたものの、後ろ足に重い障害を負い、ともに歩けなくなつてしまつた。動物愛護団体を通じて引き取り手を捜したものの、障害のことが遠因となつて引き取り手が見つからなかったため、杏は大家に頼み込んで自分で飼うことにしたのだ。

杏はその犬に「ハッピー」という名前をつけた。不幸な生い立ちに負けず、幸せになつて欲しいという願いを込めて。

この小さな同居者は杏に非常によく懐いた。ハッピーは、杏が大学やアルバイトから帰宅すると、千切れんばかりに尻尾を振りながら、後ろ足を引きずるようにして必ず彼女を玄関で出迎えた。杏が家に居る時は一時も離れず傍におり、彼女が風呂やトイレに入っている時は出てくるまで座って待っていた。寝るときも一緒に、杏が布団に入ると自分も入ってきて甘えるように身体を寄せて丸くなるのだった。

そんなハッピーを否はとても可愛がった。彼女はことあるごとにハッピーに対して声をかけ、頭や身体を撫でてやり、抱きしめて、そして褒めてやった。否にとってハッピーは、まるで自分の子どものような存在であると同時に、かけがえのないパートナーのような存在でもあった。教育実習が無事に終わり、大学が卒業できると決まった時、彼女が一番先に報告したのは、母親ではなくハッピーであった。

「これからもずっと一緒だよ、ハッピー」

杏が微笑みながらそう話かけると、ハッピーはうれしそうに尻尾を振った。

しかし、幸せは長くは続かなかった。

後に警察が「人間の姿をしたケダモノ」と評することになるその男——松永秀久は、はつきり言つて、人間のクズであつた。彼は暴行、傷害、窃盗、強盗、強姦など、これまでに数え切れないほどの罪を重ねてきた人物で、その事件を起こす三時間前に出所したばかりだつた。

松永は、これまで外で生きてきた人生よりも長い時間を刑務所の中で過ごしてきた男だが、刑務所を出た時、彼は更正どころか全くと言っていいほど反省していなかった。彼はむしろ、自分が罪を犯したとすら思っておらず、刑務所に入られるという行為自体が不本意の極みであり、心の中ではどす黒いわだかまりを抱えたままむしゃくしゃしており、それをどうにかして発散したいと思っていた。

「くそつ、くそくそくそくそくそくそくそくそくそくそがッ！」

松永が、身勝手な不満を唾と共に吐き捨てた時、偶然（不幸）にも、彼の視界に入ってしまったのが林原杏であった。

後に松永は、警察の取り調べに対して、「誰でもよかった」

とふてくされた態度で話しているが、それは相手のことをまったく考えていない発言であつた。

松永は杏の後をつけ、彼女がアパートの鍵を開けた瞬間、後ろから襲いかかった。杏の口を手で塞ぎ、恐ろしい声で囁いた。

「騒ぐな！ 騒いだら殺すぞ！」

「……………」

この時、恐怖で声が出せない主人に代わって大声で吠え立てたのがハッピーであった。普段は温厚で大人しいハッピーが、杏を助けるため、松永に立ち向かった。

しかし、ハッピーは松永に敵わなかった。元々小さな身体に加え、足が不自由な彼は、怒り狂った松永によって蹴り飛ばされ、思いっきり踏み潰され、さらには壁に叩きつけられて、口から大量の血を吐いて動かなくなってしまった。ただ、睨だけはまだ開いており、その瞳には、松永によって蹂躪される主人の様子が写されていた。

松永は杏に対して暴力を振るった。それも、とてつもなく残虐で非道な暴力を。

松永は、抵抗する杏の顔面を何発も殴りつけると、ぐったりとした彼女の服を剥ぎ、全裸にして彼女を犯した。途中、杏が悲鳴をあげたり、逃げ出そうとすると、そのつど殴りつけ、鼻をへし折り、歯を折った。杏は血塗れになりながら、泣きじやくり、許しを乞い、助けを求めたが、松永はそうした悲痛な叫び声には一切耳を貸さず、むしろより一層興奮して強姦を繰り返した。

最後、杏は全裸のまま土下座し、額を床に擦りつけながら命乞いをした。

「お願いします……私はまだ、死にたくないの……このことは誰にも言いませんから、どうか命だけは助けてください………」

しかし、松永は杏の命乞いを嘲笑い、無視した。

彼は土下座をしたまま恐怖で身体を震わせている杏の頭を靴底で踏みつけると、顔に邪悪な笑みを浮かべて宣言した。

「うっせ、死ね」

松永は、台所にあった油を杏の身体にかけると火を点けた。

杏は瞬く間に炎に包まれた。

彼女は、「ギャーッ！」とひと際大きな悲鳴を上げると、「熱い、熱いッ！」と、この世のモノとは思えぬ絶叫を放ちながら暴れ狂い、悶え苦しむと、そのままの状態の外に飛び出し、火を消そうと転げまわっていたが、やがて動かなくなり、身体を丸め、うずくまった状態で力尽きてしまった。その様子を、松永は大笑いしながら見ていたという。

異変を察した近所からの通報で警察が到着した時、松永は、抵抗せず大人しく逮捕された。その顔には晴れ渡った青空のような笑みが浮かんでいたが、その笑みは、人間のモノとは思えぬほど邪悪で歪な笑みであった。

警察での取調べに対し、当初松永は、

「誰でもよかった」

と供述していたが、後に意見を翻している。

彼は顔に薄ら笑いを浮かべながら、イスに背をもたれ、ふんぞり返りながら次のように述べている。

「ムシヨから出て歩いてたら女がいきなり誘ってきた。家について行ったら、「犯して欲しい」と言つて服を脱ぎはじめた。だから犯してやったんだ。そしたら、「死にたいから殺して欲しい」って言ってきたんで、望み通り火を点けて殺してやった。だから俺は悪くねえ。無罪だ、無罪」

警察は松永の態度に憤慨し、彼のことを「人間の姿をしたケダモノ」と罵った。

しかし松永は、悪びれた様子もなく薄ら笑いを浮かべ、接見した弁護士に対しては、「自分は警察から不当に扱われた。暴力を振るわれた」と訴えた。これは後の裁判にて、自らの罪を少しでも軽くするための行為であったのだが、松永は裁判を待たずして死ぬことになる。

拘置所に入れられた松永に異変が起こる前日、瀕死だったハッピーが死んだ。

松永の逮捕と同時に助けられ、どうにか一命を取り止めたハッピーだったが、彼はそれから死ぬまでの間、凄まじい形相で咆え続け、憤怒と憎悪の瞳で天を仰ぎ、血を吐くのもお構いなしに悶え狂った。それは無力な自分に対する怒りだったかも知れないが、目に見えない何モノかに訴えかけるような行為にも見えた。

ハッピーは死ぬ前夜、これまでとは違った異質な声で咆えた。

「イギガアアアアツ、アイギガアアアアアアツ、ヨオオオグ・ソドオオオオオ  
ース、アグギャガアアアアアアアツ！」

それは決死の叫び声であり、訴えのようであった。

この時、動物病院では異変が生じていた。ハッピーの叫び呼応するかのようにして、ゲージに入れられていた犬たちが、まるで彼の呼びかけを助けるかのように一斉に同じ叫び声で咆えはじめたのである。この光景を目撃した獣医は、後に、「それはまるで何かの儀式のようであった」と語っている。

また、同時刻、近所に住む住民たちは、動物病院の上空で蠢く不思議な雲を目撃している。それは赤黒い色をした雲で、何十本もの太い触手のようなモノが、月明かりを受けて蠢いていたという。それは確かに意思を持つ何モノかのようにであったが、やがて虚空に消えて見えなくなってしまうたそうだ。そしてその雲を目撃した住民たちは、その後、何日もの間、高熱や猛烈な吐き気に苦しめられることになる。

そして話は松永の話題に戻る。

逮捕されてから一貫して不遜な態度をとり続けていた松永であったが、ハッピーが死んだ翌日から彼の身を怪異が襲い始めた。

ある夜、松永は悲鳴を上げ、駆けつけた刑務官に怯えきった様子で訴えた。

「た、助けてくれ！ い、犬が、黒い大きな犬が襲ってくるんだ！ 牙を剥きだしにして、涎を垂らしながら、俺を喰らおうと、苦しめようと、舌なめずりをしながら襲ってくるんだよお！」

松永は必死の形相で訴えたが、刑務官たちは一笑に伏してまともにとり合おうとはしなかった。

「馬鹿言っていないでさっさと寝ろ。このボケが」

松永に良い印象を抱いていなかった彼らは、そう吐き捨てて去って行った。

「待ってくれ！ ここに居てくれ！ ひとりにしないでくれッ！」

という松永の訴えは、完全に無視された。

朝になって刑務官たちは、昨夜の松永の様子を話題にして笑ったが、しかしその後も松永の恐慌は続いた。

松永は夜になると大声を上げ、まるで何モノかから逃げるように拘置所内を転げまわり、あるいは隅にうずくまって頭を抱えて泣き叫んだ。

「助けてくれ！ 誰か助けてくれ！ 犬が、黒い大きな犬が襲ってくるんだ！ 痛てえッ、痛てえッ！ 噛まれたッ、喰われるッ！ 痛てえッ！ 誰か、誰かなんとかしてくれえ！」

松永は必死になって訴えたが、誰もが彼の言動を鼻で笑い、まともにとり合おうとはしなかった。松永の人柄を知る刑務官たちは、彼の狂態を少しでも罪を軽くするための演技だと考えたからだ。

それでもなお、松永は狂ったように訴え続けた。

「なんで、なんで誰もわかってくれないんだ！ ほら、あそこ、そこに居るのに！ なんで誰にも見えないんだよお！ ああ、また襲ってくる！ 喰われる！ 身体に牙が突き当たってる！ 痛てえッ！ 死ぬほど痛てえッ！ なんで誰も助けてくれないんだ！ 助けてくれッ、お願いだから助けてくれッ！ 痛てえええッ！」

松永は、七日の間、夜になると叫び散らし、助けを求めたが、誰も彼に救いの手を差し伸べようとはしなかった。誰もが松永の狂態を「演技」だと考えていたし、その上、松永が言う「黒い大きな犬」とやらは、松永にしか見えなかったからである。

ゆえにこそ、松永の恐怖は尋常ならざるものであったに違いない。

八日目になると、もはや彼は同じ言葉しか発しなくなっていた。

[illegible]

松永は、もはや正気ではなくなっており、土下座し、額を床に擦りつけた状態で、恐怖に怯えた眼差しで同じ言葉を繰り返していた。

そして九日目の朝、松永は死んでいるのが発見された。彼の身体は、全身がバラバラに引き裂かれており、内臓が引きずりだされ、室内は臓物と肉片が飛び散った血の海と化していた。そして、奇妙なことに、松永の頭部だけが、後日、別の場所から発見された。

松永の失われた頭部は、被害者である林原杏の墓の前に添えられていた。